様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２５４７

研究課題名（和文）19世紀アメリカ女性作家たちの旅行記研究

研究課題名（英文）Study on 19th Century American Women Travel Writing

研究代表者
城戸　光世（Kido, Mitsuyo）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・教授

研究者番号：１０３５１９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：コロナ禍で予定していた調査ができず2年ほど期間延長したが、2017年にはSarah Orne Jewettについてシンポジウムで招待発表を行い、また同年ピュリツァー賞受賞者Megan Marshall氏を招いて国際ワークショップを企画開催することができた。また2018年には国際学会でのセッション、同年イギリス・ロマン派学会シンポジウム、2021年フォークナー協会や英文学会関東支部など各学会シンポジウムに登壇し、JewettやEdith Wharton、Margaret Fullerら広くアメリカ女性作家たちの旅行記について発表し、様々な共著や学術誌等でその成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
旅行記研究は、ジェンダー、人種やエスニシティ、ポストコロニアリズムといった様々な観点から、また人類学や地理学といった異なる専門分野と領域横断的に関心を共有する点からも、21世紀に入って研究が盛んになってきた分野である。イギリス文学についてはいくつか日本でも優れた研究が登場しているものの、アメリカ文学については散発的に研究が見られる程度であり、まだその研究は端緒についたばかりだと言える。本研究課題では、交通革命の起こった19世紀アメリカの女性作家たちの旅行記に注目し、数多くの学会シンポジウムや共著論文等でそのテクスト分析と報告を行い、このジャンルとその研究の重要性を周知させたことに意義がある。

研究成果の概要（英文）：Due to the COVID-19 pandemic, I was unable to conduct all of the planned research, so I extended the research period by about two years. Because of this, I was able to make more presentations and publish more papers on this theme. in 2017, I was invited to do a presentation on Sarah Orne Jewett for a symposium in Kyushu. In the same year, I invited Megan Marshall, a Pulitzer Prize winner to hold an international workshop with other researchers. In 2018, I joined a session at an international conference held in Kyoto, and I was invited to the British Romantic Society for their symposium in the same year. In 2021, I made presentations for the symposia at three different academic societies such as Faulkner Society in Japan, the Kanto Branch of the English Literary Society, and American Literature Society in Kyushu. I also published several articles in academic journals and published books on this topic.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学　女性作家　旅行記研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

80 年代頃から始まるキャノン論争を反映した 19 世紀女性作家たちの重要な研究以降、数多くの女性作家たちのアンソロジーが登場し、かつては絶版で入手不可能だったテクストも次々と再版されていた。現在のアメリカ文学史やノートンなど影響力の大きなアンソロジーには、Margaret Fuller や Harriet Beecher Stowe、Louisa May Alcott のような、当時大いに注目され人気があった女性作家たちのテクストはもとより、Harriet Jacobs の奴隷体験記や Susan Warner の家庭小説など、ジャンル的にも幅広いテクストが取り上げられるようになった。彼女たちの作品の多くは、かつて domestic であり sentimental であるとして真面目な文学批評の対象としては取り上げられてこなかったが、その家庭性のイデオロギーや感傷性が文学的戦略として再考され、再評価されていった。そのような家庭や家族を中心とした価値観を基盤とした文化的・文学的慣習から一歩ひいて、広く自身の文化圏を超えて「他者」と接し、自分たちを縛る domesticity を脱却したり、あるいは同郷人とはまた異なる nationalism のあり方を模索するなど、いわばコスモポリタンの原型ともいうべき姿勢を示した女性作家たちもいた。家や国に縛られた女性たちとはまた異なるアイデンティティの有り様について、そしてアメリカという国の社会や文化について、彼女たちに改めて考えるきっかけを与えたのは、印刷文化の発展によって大西洋両岸で盛んに書籍や思想が流通していたことに加え、「交通革命」とも呼ばれる移動テクノロジーの発展によって 19 世紀に大衆化されるようになった、「旅」という体験が大きい。当時はジャンルとしての旅行記が大いに流行しており、*American Travellers Abroad: A Bibliography of Accounts Published before1990* (1999)でも明白なように、旅が身近なものとなった 19 世紀にヨーロッパや中南米や中近東に渡航する人たちは、事前に目的地についての様々な旅行記や体験記を読んでいわば予習をするのが定番であり、また旅から戻れば、その体験や異国からの手紙を出版することは珍しくなかった。Mark Twain や Henry James などリアリズムを代表する作家たちも数多く旅行記を残しているが、ロマン主義の時代と言われるアンテベラム期の作家たちも様々な旅行記を出版しており、これら主要男性作家たちの旅の経験や表象、そのトランスナショナル性については、Paul Giles の *Transatlantic Insurrections: British Culture and the Formation of American Literature, 1730-1860*（2001）や Leslie Elizabeth Eckel の *Atlantic Citizens: Nineteenth-Century American Writers at Work in the World* (2013)などに見られるように、アメリカ文学をトランスナショナルな視座から捉え直そうとする傾向の一環として大いに研究が進んでいた。日本でも『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネサンス文学』（2013）といった、19 世紀アメリカ作家たちのトランスナショナリティやコスモポリタン的側面に注目した論考は数多く登場し、様々に議論されてきた。一方、女性作家たちもまた、様々な旅の体験を記録に残しており、21 世紀以降この分野においても少しずつ研究が始められた。当時の西部を旅した印象やフロンティアにおける先住民や女性たちの生活を綴った旅行記を出版し、女性として初の海外特派員ともなって、革命熱に沸くヨーロッパから記事を送り続けた Fuller や、*Uncle Tom's Cabin*（1852）が国内外でベストセラーとなった後、大西洋両岸における反奴隷制運動の促進のためヨーロッパに渡り、二巻本の旅行記 *Sunny Memories of Foreign Lands* (1854)も残している Stowe などの国を越えた活動とその影響については、それぞれ *Margaret Fuller: Transatlantic Crossings in a Revolutionary Age*（2007）や *Transatlantic*

Stowe: Harriet Beecher Stowe and European Culture(2009)といった研究書も出版されるなど、とみに研究と再評価が進んでいた。日本においてもまた、彼女たちのトランスナショナルな活躍については、自身も共編者となった『越境する女──十九世紀アメリカ女性作家たちの挑戦』（2014）や前述『環大西洋の想像力』などでも扱っており、また画家だけでなく作家としての評価の著しい Nathaniel Hawthorne の妻 Sophia の中米やヨーロッパの旅行記については、『アメリカン・ルネサンス――批評の新生』（2013）所収の拙論「創作への旅—旅行記作家としてのソファイア・ピーボディ・ホーソーン」などでも取り上げてきた。しかしアメリカを出て、旅人／他者としての視点から自国やヨーロッパなどを観察し、旅行記を残してきたのは、Fuller や Stowe など、アメリカン・ルネサンスの文学史のなかで今や中心的な位置づけが行われている主要作家たちばかりではない。*New York Times* 紙の最初の女性記者となり、海外から記事を送った Grace Greenwood（1823-1904）や、夫についてフロンティアで過ごした経験に基づいた処女作を出版後、夫の死後 *Union* 紙のために 6 カ月ヨーロッパからの特派員記事を送り、*Holidays Abroad*（1849）などの旅行記を書いた Caroline M. Kirkland（1801-1864）、19 世紀アメリカにおけるもっとも有名な女性作家のひとりであると同時に一年をかけたヨーロッパ旅行の体験を旅行記 *Letters From Abroad to Kindred at Home*(1841)として出版した Catharine Maria Sedgewick（1789-1867）などもいるが、彼女たちの旅の経験とその旅行記についての研究はまだ端緒についたばかりである。また南北戦争後から 20 世紀にかけての女性作家、Sarah Orne Jewett や Edith Wharton らの旅行記も、これら 19 世紀アメリカ人女性作家たちの旅行記の系譜として一貫して扱った研究はまだみなかった。

２．研究の目的

本研究では、Fuller や Stowe をはじめ、19 世紀女性作家たちに旅がもたらしたトランスナショナル（トランスカルチュラル）な視点が、彼女たちの作品や思想や行動にどのような影響を与え、彼女たちが同時代のアメリカ社会や国家をどうとらえていたのか、また彼女たちが当時支配的であった domestic Ideology、あるいは the cult of true womanhood とどう対峙し、それが 19 世紀に発展するフェミニズム思想の萌芽とどう結びつくのかを明らかにする。具体的には、これまで行ってきたフラー研究の発展として、再度 Fuller のイギリスやイタリアからの特派員記事を精査することで、彼女の革命思想とアメリカ共和国の理念への期待がどのように彼女のフェミニズム思想に結びついているのかを再確認するとともに、Stowe の反奴隷制小説出版と彼女の中西部や南部やヨーロッパなどニューイングランド以外の場所への旅や滞在の体験とがどう結びついているのかを明らかにし、また日本ではあまり取り上げられることがない Kirkland やその他 19 世紀後半の女性作家たちの旅行記について、彼らのフロンティア体験記でフロンティアや先住民がどう表象され、それが当時の社会でどう受容されているのか、彼らの旅の体験がそれぞれの創作にどう影響しているかも明らかにする。本研究で旅する女性作家たちを取り上げ、近代化の始まる初期の旅の体験や表象を取り上げることは、リアリティの捉え方や他者への共感が問われる現代において、異なる現実や文化、他者との交流について再考する新鮮な視座を提供してくれると考えられ、意義深い研究となると期待できる。

３．研究の方法

主に旅の実態調査として当時の資料を収集するためのアメリカおよびヨーロッパの現地調査と文献調査からなる。

４．研究成果

2017 年度は、19 世紀後半の女性作家について、とりわけ Sarah Orne Jewett の作品における女性や自然との共生関係が、作品の語り手である旅行者、一時滞在者としてのスタンスとどのようにかかわりあっているのかについて考察し、3 つの研究発表の中でその研究成果を発表した。1)「ポストロマン主義時代のエコロジカル・ユートピア――Sarah Orne Jewett 作品における自然と人の共生コミュニティ」日本英文学会九州支部第 70 回年次大会シンポジウム「ソローの影響力」(2017 年 10 月 21 日（土)、長崎大学文教キャンパス)、2）"Travellers in Ecological Communities: Reading Sarah Orne Jewett in the Age of Ethical Turn"International Workshop "Transcendent Women in the Long 19th Century"（2017 年 11 月 10 日（金曜日)、広島大学東広島キャンパス)、3)「19 世紀アメリカ文学研究における Turn to Ethics――ホーソーン及びジュエット作品にみる〈親密圏〉の諸相」日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部 3 月例会シンポジウム「19 世紀アメリカ文学における親密圏の形成――〈他者〉と〈共感〉をめぐって」（平成 30 年 3 月 25 日（日)、関西学院大学大阪梅田キャンパス）がそれである。1）については平成 30 年度の英文学会大会 *Proceedings* にその概要を掲載した（『大会 Proceedings』2018 年、323-24 頁)。2）は、Margaret Fuller の伝記でピュリッツァー賞を受賞した Megan Marshall 氏（Emerson College）をゲストに迎え、古屋耕平（神奈川大学)、堤千佳子（山口東京理科大学)、Michael Gorman（広島市立大学）と城戸の 4 名で越境するアメリカ女性たちを扱う国際ワークショップを計画し実施した際の発表である。3）については、自身も編者共著者として関わった日本ナサニエル・ホーソーン協会 40 周年記念論集『ロマンスの倫理と語り―― いまホーソーンを読む理由』（2023 年 5 月刊行）の巻頭論文「〈エシカル・ルネサンス〉期のホーソーン文学」（3-21 頁）にその一部を発表している。

2018 年度は、5 月に開催された International Poe & Hawthorne Conference のセッション、"Hawthorne and the Humanities Today"における登壇者の一人として、ホーソーンを中心とした 19 世紀アメリカ文学のトランスナショナルな受容の歴史について、“Reading The Scarlet Letter in the 21st Century”と題して発表を行った。また 2017 年度には 10 月 20 日に兵庫県立大学で行われたイギリス・ロマン派学会のシンポジウム「ロマン派と natural history」において、「Margaret Fuller の旅行記における詩人／科学者としての natural historian」と題する招待発表にてその成果を公表し、その報告論文が『イギリス・ロマン派研究』（第 43 号、2019 年、61‐65 頁）に掲載された。2019 年 3 月には 19 世紀アメリカの知のコミュニティ形成に焦点をあてた学術図書『繋がりの詩学』（彩流社）を共編者の一人として刊行し、19 世紀にイギリスから移民してのちにカリフォルニアに移住した Georgiana Bruce Kirby やユートピア共同体に移り住んだ Sophia Ripley ら女性たちのユートピア共同体での体験や回想記などを取り上げた拙論「女たちのユートピア――ブルック・ファームにおける理想と現実」（202-29 頁）が同書に所収された。

2019 年は、アメリカ中西部での現地調査で収集した 19 世紀西部開拓時代の女性たちの日記や旅行記などを整理し、2020 年に招待発表を予定していた学会シンポジウムや共著論文などでその成果を報告する準備を行いつつ、環境文学批評書『トランスパシフィック・エコクリティシズム』のスコット・スロヴィック氏による序文「トランスパシフィックな想像力と経験のエコクリティシズム」の翻訳や、日本アメリカ文学会の機関誌『アメリカ文学研究』における Takayuki Tatusmi 著 *Young Americans in Literature: The Post-Romantic Turn in the Age of Poe, Hawthorne and Melville* の書評などの仕事を行った。そして同年 9 月 28 日に福岡大学で開催さ

れたナサニエル・ホーソーン協会九州支部の研究会にて、Margaret Fuller を中心に Emerson や Hawthorne らアメリカ・ルネサンスの作家たちの湖水地方訪問・滞在記旅行記を取り上げ、ロマン派詩人たちの影響や同時代の旅行記の影響を分析した研究発表「ポスト・ロマン主義者たちの聖地巡礼――アメリカン・ルネサンス作家たちとイギリス湖水地方」を行った。

2020 年には、前述 2017 年にピュリツァー賞作家 Megan Marshall を迎えて行った国際ワークショップでの研究発表を論文にまとめたものを投稿し、”Travelers in Ecological Communities : Rereading Sarah Orne Jewett in the Age of Ethical Turn”として、環境文学批評の学術誌『*Ecocriticism Review*』第 13 号（2020、76-86 頁）に掲載された。これは対象をアメリカン・ルネサンスだけでなく 19 世紀後半のローカルカラー文学の女性作家にも拡げ、Jewett の作品にみられる旅と旅人の表象やモチーフを、19 世紀後半のアメリカにおける野外ブームなどと絡めて論じたものである。2020 年はしかし新型コロナウィルスの拡大防止のために様々な学会が中止となり、以降外国への調査旅行は控えることとなり、主にこれまでの調査と文献調査にて研究成果をまとめていくこととなった。

2021 年度は延期のものも含め計 3 つの学会シンポジウムへの登壇を依頼され、当該研究課題に関する研究成果報告を行った。まず 2021 年 5 月 9 日オンラインで開催された九州アメリカ文学会年次大会では、「イーディス・ウォートン再読――生誕 100 周年を迎えて」と題するシンポジウムが開催され、登壇者の一人として、「ウォートンの旅行記に見るピクチャレスク美学」と題して発表を行った。また 9 月 11 日には、日本ウィリアム・フォークナー協会のシンポジウム「作家とその妻／夫」がオンラインで開催され、「旅するホーソーン夫妻―創作と家庭の相克」と題し、Hawthorne 文学に妻 Sophia のとりわけ旅行記における風景や自然の描写がどのように影響を与えたのかを論じた。同シンポジウム報告は、2022 年 4 月刊行の学会機関誌『フォークナー』24 号にて特集論文として収録された。また同年 11 月 6 日にオンラインで開催された日本英文学会関東支部第 20 回（2021 年度秋季大会）シンポジウム I「十九世紀アメリカ文学における移動・移民」にも招待され、「女たちのアメリカ西部体験記 ――カークランド、フラー、ファーンハム」と題して発表を行った。19 世紀前半のアメリカ中西部に実際に移り住んだ経験を持つ Kirkland と Eliza Farnham、同時期に同じ地域を旅した Fuller のそれぞれの西部体験記を取り上げて、19 世紀アメリカ女性作家たちのそれぞれの西部体験とその記録の特徴を分析した。

2022 年度は、Lydia Maria Child、Catharine Beecher、Stowe ら女性作家たちの家政学についての著書とその思想を、Beecher 姉妹の中西部体験にも触れつつ論じた「家政学の誕生と家庭性神話の再考――チャイルド、ビーチャー、ストウ」が、倉橋洋子他編集『19 世紀アメリカ作家たちとエコノミー――国家・家庭・親密な圏域』（彩流社、2023 年 2 月刊行）に所収された。また 19 世紀アメリカ古典文学のキャノンを確立した F. O. Matthiessen の「アメリカン・ルネサンス」概念の源流とその後世の評価を再考した論文「使用されうる過去――20 世紀のアメリカン・ルネサンス再考」が、中・四国アメリカ学会設立 50 周年記念論集『アメリカ研究の現在地――危機と再生』（彩流社、2023 年 2 月刊行）に所収された。その他研究期間最終年度の研究成果としては、エコクリティシズム研究学会第 34 回年次大会のシンポジウム「〈その後〉の世界と文学―ポストパンデミック、ポストディザスター、ポストアポカリプス」を企画立案し、司会するとともに、「ポストアポカリプスの今昔―ホーソーンからアトウッドへ」と題する発表も行った。研究機関全体を通して、ピュリツァー賞受賞者 Megan Marshall 氏を招いて、越境する女性作家たちを取り上げた国際ワークショップを企画実施したり、また各学会シンポジウムに登壇して、Fuller、Jewett、Wharton、Kirkland、Stowe など広くアメリカ女性作家たちの旅行記について報告し、様々な共著や雑誌等で発表できたことは大きな成果だったと言えるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 城戸光世	４．巻 24
２．論文標題 旅するホーソーン夫妻―創作と家庭の相克	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『フォークナー』	６．最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Mitsuyo KIDO	４．巻 13
２．論文標題 Travelers in Ecological Communities: Rereading Sarah Orne Jewett in the Age of Ethical Turn	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Ecocriticism Review	６．最初と最後の頁 76-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 城戸光世	４．巻 90
２．論文標題 ポストロマン主義時代のエコロジカル・ユートピア――Sarah Orne Jewett 作品における自然と人の共生コミュニティ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 第90回大会Proceedings	６．最初と最後の頁 323-334
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 城戸光世	４．巻 43
２．論文標題 Margaret Fullerの旅行記における詩人／科学者としてのnatural historian	５．発行年 2019年
３．雑誌名 イギリス・ロマン派研究	６．最初と最後の頁 61-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/7967110	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 城戸光世
2．発表標題 ポストアポカリプスの今昔―ホーソーンからアトウッドへ
3．学会等名 第34回エコクリティシズム研究学会大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 城戸光世
2．発表標題 ウォートンの旅行記に見るピクチャレスク美学
3．学会等名 九州アメリカ文学会年次大会シンポジウム
4．発表年 2021年

1．発表者名 城戸光世
2．発表標題 旅するホーソーン夫妻―創作と家庭の相克
3．学会等名 日本ウィリアム・フォークナー協会第24回シンポジウム
4．発表年 2021年

1．発表者名 城戸光世
2．発表標題 女たちのアメリカ西部体験記―カークランド、フラー、ファーンハム
3．学会等名 日本英文学会関東支部第20回大会シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 城戸光世
２．発表標題 ポスト・ロマン主義者たちの聖地巡礼――アメリカン・ルネサンス作家たちとイギリス湖水地方
３．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会九州支部
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mitsuyo KIDO
２．発表標題 Reading The Scarlet Letter in the 21st Century
３．学会等名 International Poe & Hawthorne Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 城戸光世
２．発表標題 Margaret Fuller の旅行記における詩人／科学者としての natural historian
３．学会等名 イギリス・ロマン派学会第44回全国大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 城戸光世
２．発表標題 ポストロマン主義時代のエコロジカル・ユートピア――Sarah Orne Jewett作品に おける自然と人の共生コミュニティ
３．学会等名 日本英文学会九州支部第70回年次大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 城戸光世
２．発表標題 Travellers in Ecological Communities: Reading Sarah Orne Jewett in the Age of Ethical Turn
３．学会等名 International Workshop "Transcendent Women in the Long 19th Century"（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 城戸光世
２．発表標題 19世紀アメリカ文学研究におけるTurn to Ethics――ホーソーン及びジュエット 作品にみる〈親密圏〉の諸相
３．学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部3月例会シンポジウム
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 城戸光世	４．発行年 2023年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 288
３．書名 19世紀アメリカ作家たちとエコノミー：国家・家庭・親密な圏域	

１．著者名 城戸光世	４．発行年 2023年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 384
３．書名 アメリカ研究の現在地――危機と再生	

１．著者名 スコット・スロヴィック著城戸光世訳	４．発行年 2019年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 360
３．書名 トランスパシフィック・エコクリティシズムー物語る海、響き合う言葉	

１．著者名 倉橋洋子・高尾直知・竹野富美子・城戸光世（編集）	４．発行年 2019年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 349
３．書名 繋がりの詩学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 International Workshop "Transcendent Women in the Long 19th Century"	開催年 2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関